

三谷孝著

## 現代中國秘密結社研究

孫 江

戦後日本の中國民衆史研究は、まるで一枚の鏡のように、「過去」としての中國だけではなく、「同時代」の日本をも映し出している。しばしば指摘されるように、かつて盛んに行われた中國民衆史研究が一九八〇年代以降急速に「凋落」したのは、中國研究者が中國革命そのものに幻滅したためである。田原史起氏は『二十世紀中國の革命と農村』のなかで次のように述べている。

現在、中國研究者はおよそ現状分析か歴史研究のどちらかに従事しているが、現状分析をおこなう人びとにとって、革命はすでに「現状」ではないし、歴史家にとっても共産黨の革命は、中華民衆史などと比べても、研究意欲をそそるトレンド的なテーマではなくなっている。<sup>(1)</sup>

もしこれが日本の中國研究の「現状」を反映したものであるなら、それは憂慮すべきものである。中國の革命を研究テーマとして取り上げるかどうか、それは個々の研究者が選擇するものである。しかし、二〇世紀の中國が「革命の世紀」であり、それゆえ二〇世紀中國の歴史が「革命の歴史」であったことを念頭におくならば、歴史研究であれ現状分析であれ、革命は二〇世紀から今

日にかけての中國を研究対象とする研究者にとつて避けて通れない重要なテーマと言うべきであろう。

田原氏が指摘した現象は日本だけに見られるものではない。かつて中國革命の研究に情熱を注いだアメリカの中國研究者たちにとつても、冷戦の終結は中國の革命を見つめ直すきっかけとなった。彼らの目に映ったのは、中國革命の血に染まった歴史であつて、革命によつて、社會の法や秩序、さらには人間の肉面的な倫理観までも取り壊されてしまった、暗澹たる歴史であつた。J. エシエリックは、中國の革命がもたらしたのは解放ではなく、權力の交替に過ぎなかつたと指摘した。<sup>(2)</sup>これに對して、彼と同時代の中國研究者E. ペリーは、暴力と殺戮はむろん批判すべきものだが、「暴力と流血は中國革命の傳統の一部分に過ぎず、それ以外の部分についても考察すべきだ」と述べ、名指してエシエリックを批判した。<sup>(3)</sup>その具體例として、ペリー氏は、共産黨員は一九二〇年代初頭江西省の安源鑛山で労働者、農民およびその家族の教育水準の向上に力を注ぎ、非暴力のストライキも成功させた、と述べた。そして、アメリカの中國研究者が革命のテーマから離れた、いわゆる「革命に別れを告げる」現象について、ペリー氏は、中國の革命はまだ終わつておらず、近年中國で起きた經濟的奇跡や中國の政治・經濟體制を理解しようとするなら、革命は缺くことのできないキーワードである、と強調した。<sup>(5)</sup>

三谷孝氏の遺著『現代中國秘密結社研究』は、氏が中國革命や中國の「民衆」と眞正面から向き合つた學問的軌跡を記録したものである。この意味で、本書は著者の研究者としての自畫像と言えよう。本書は「會黨」や「民衆宗教」を対象とする狹義の「秘

「密結社」研究というよりも、中國民衆史研究という廣い分野に屬するものである。著者の生前に出版された中國語著書『秘密結社與中國革命』の題名が本書の性格をよりの確に表現しているように思える。

## 一、構成と内容

本書は三つの部分、十四の章によって構成される。

まえがき（内山雅生）／凡例

### 第一部

第1章 現代中國秘密結社研究の課題

第2章 戦前期日本の中國秘密結社についての調査

### 第二部

第3章 國民革命期の北方農民暴動——河南紅槍會の動向を中心にして——

第4章 國民革命期における中國共產黨と紅槍會

第5章 紅槍會と鄉村結合

第6章 南京政權と「迷信打破運動」（一九二八—一九二九）

第7章 江北民衆暴動（一九二九年）について

第8章 大刀會と國民黨改組派——一九二九年の溧陽暴動をめぐる——

第9章 傳統的農民鬪争の新展開

### 第三部

第10章 天門會再考——現代中國民間結社の一考察——

第11章 天門會發祥の地を訪ねて——河南省林縣東油村訪

## 問記——

第12章 中國農村經濟研究会とその調査

第13章 抗日戦争中の「中國農村」派について

第14章 反革命鎮壓運動と一貫道——山西省長治市の事例

初出一覽／あとがき／索引（事項・人名）

著者のかつての研究仲間であり、著者の研究の良き理解者でもある内山雅生氏は、本書の「まえがき」において、本書各章の内容を要領よくまとめ、讀者を著者が構築した中國民衆と秘密結社の世界に案内している。

第一部は第1、第2章からなる。この二章は、その初出論文の刊行時期が比較的遅いこともあり、本書全體の序論として位置づけることができる。従来の民衆史研究において民衆運動がしばしば「即目的階級鬪争から對目的階級鬪争への發展」と位置づけられることについて、著者は冒頭の第1章で次のように批判している。それによれば、このようなテーゼは、民衆運動に對する「外部からの衝撃」を重視するあまり、民衆の組織、民衆運動そのものに對する考察を疎かにする嫌いがある。民衆運動を眞に理解しようとするなら、民衆が集まる「場」である秘密結社を理解しなければならぬ、という。秘密結社の定義についても、中國の代表的秘密結社研究者蔡少卿が教門と會黨の二つのタイプに分類するのと異なつて、著者は、中國の秘密結社を傳統的會黨組織の性格を受け繼いだ哥老會のほかに、紅槍會を代表とする農村型秘密結社と青幫を代表とする都市型の二つの類型がある、と指摘する。

これらはいずれも先行研究と批判的に向き合うことから得られた著者独自の見解である。第2章では、日本人が二〇世紀前半期に行った中國秘密結社を對象とする調査・研究の歴史を振り返る。その射程は明治末期外務省囑託として中國に渡った大陸浪人の調査報告、滿鐵や興亞院華北聯絡部の調査報告、平山周、長野朗、橋樑、末光高義らの著作など幅広い調査、研究に及ぶ。研究史を知るうえで貴重なものであるといえる。

第二部は第3から第9章までの七つの章から構成される。社會史的な研究に重きをおいた第5章を除いて(第5章に關しては後述する)、その他の章はいずれも一九七〇年代初期から一九八〇年代初期にかけて執筆されたものである。日中國交正常化から中國の「改革開放」政策が始まるまでのこの十年間、著者は、「安保」闘争や大學紛争に觸發されて、歴史變革の主體を探索しようとし、その一環として、中國民衆の主體的意識の問題に關心を寄せた。同時代のアメリカの中國研究では、ベトナム戦争反對とカウンターカルチャー(counter-culture)を経て、共產主義革命の歴史的基礎とされる民衆反亂と民衆の秘密結社に關心の焦點が移った<sup>(7)</sup>。この時代の日米兩國の中國研究には共通する部分もあれば、異なる點もみられる。

第二部の第3、4、9章では、北方軍閥と紅槍會運動との關係を考察している。第3章の骨子は著者の修士論文であり、ここに著者の研究者としての基本的な姿勢がすでに形作られている。著者は、民衆革命の「先進」と「後進」という中國共產黨の二項對立的革命敘述の枠組みから距離を取って、「北方における農民闘争の系譜の中で問題を捉える試みがより重點になされねばならな

い」(三八頁)、と述べている。著者によれば、國民革命期河南省紅槍會の指導層が「軍閥的省權力の分解と集中の循環及び地方支配への對處の仕方とのあいだでバランスをとりつつ、機敏な動きを示し、自らの在地支配の確保に、成功した」(七二頁)。最終的に、紅槍會は「割據」勢力となり、その大部分は馮玉祥の部隊に收容、改編され、中國共產黨の動員の對象となった、という。第4章では、紅槍會に關する中國共產黨の革命言説について

考察したものである。著者によれば、共產黨は國民革命失敗後、國民革命軍に代わる動員の對象として、紅槍會を反帝國主義闘争・反軍閥闘争の主力と見なしていた。しかし、階級闘争理論に基づいた革命／反革命という硬直した二項對立の枠組みにとらわれ、共產黨の紅槍會工作は失敗に終わった。紅槍會運動の内在的發展を重視する著者の研究手法は、天門會を扱う第9章でも貫かれていいる。著者によれば、秘密結社天門會のリーダー韓欲明の「夢における神のお告げが會の創立の直接的な契機」(二二一―二二二頁)となったことから、天門會は傳統的な結社とみてよい。しかし、「韓(欲明)らの舊天門會指導者が」その他の紅槍會組織の轍を踏みながらも、天門會は共產黨指導の武装暴動に加わり、共產黨の軍隊に改編され、「このように土匪的存在へと變質しつつあった一九三〇年、天門會の活動が残した成果が、別の面で新たな展開を見せ」(三三一―三三三頁)、天門會は「傳統的な農民組織から階級的な農民組織へとむかう」(二二二頁)、という。

第6、7、8章は南京國民政府と刀會との關係を考察したものである。そのうち、一九二八―一九二九年の國民黨政權による「反迷信」運動を扱う第六章は、著者の研究者としての力量を餘

すことなく發揮した著者の代表作と言えよう。著者は、科學と迷信、進歩と反動という迷信打破運動の喧噪の背後に隠れた、運動を動かす眞の力を探ろうとし、國民黨中央と國民政府行政部門との對立、中央政府と地方社會との對立關係に分析の焦點を當てた。その結論として、著者は、「迷信打破運動」は地方の國民黨の若手黨員によって主導されたもので、彼らは社會運動の成果をもって政府の官僚主義を批判すると同時に、廟宇、偶像、祠堂の權威を後ろ盾に國民黨の民衆「指導」に反對する土豪層に打撃をあたえようとした、と指摘する。

續いて第7章では、一九二九年江蘇省北部の宿遷縣で起きた刀會暴動を事例に、「迷信打破」運動に對する地域社會の反應を考察する。著者は、國民政府と國民黨本部の間の對立を背景に、「土豪劣紳」や僧侶が民衆を唆し、「進歩」と「革新」の名の下での中央政府による強引な改革に反撃したと分析する。そして、一九二九年一月江蘇省深陽縣の大刀會暴動を扱った第8章においても、著者は、未遂に終わったこの暴動は國民黨左派の末端組織が仕掛けたもので、そこに國民黨内部の黨派間の對立が基層社會に反映されている、と指摘する。

本書第二部第5章および第三部の各章を構成する論文は、ほとんどが一九八〇年代末以降に執筆されたこともあり、そこから著者の研究視點がそれまでの政治史／革命史から社會史に移ったことがうかがえる。これらの諸論文を執筆するため、著者は何度も中國を訪れ、フィールドワークを通じて、文献資料からは得られない歴史への實感を手に入れ、それゆえ、個々の論文には歴史に對する著者の豊かな理解がちりばめられている。第5章では、紅

槍會の組織の在り方に焦點を當て、民衆信仰、組織、地域社會の特徴が紅槍會運動、とりわけ人々の集合離散の在り方に與えた影響を分析する。第10章では、新しく發見された文献史料と現地でのインタビューに基づいて天門會について再考察する。著者は、從來、天門會の集權的な組織構造によって、この結社は四十數名の小さい組織から短期間に二十三縣、四十萬人の大きな組織に広がった、と考えていた。しかし、新發見の資料を分析した結果、著者は次の結論に至った。すなわち、天門會という旗印の下に複數の「分壇」と呼ばれる組織が存在し、これらの組織はそれぞれ異なる動機を持っていた。日中戦争期において、個々の「分壇」は各々の目的に應じて行動した、という。

第11章は天門會發祥の地である河南省林縣東油村で行ったインタビューの記録であり、第10章の基本史料にもなっている。第14章は未公開資料を用いて、一九五〇年代初期の「反革命分子」弾壓運動期に山西省長治市で活動した二つの一貫道組織（古廣生系と薛洪系）の活動を追った。著者は、一貫道が彈壓を受けたのはそれが「反革命」的組織であったからではなく、一貫道そのものが共產黨のイデオロギーにとって異質な存在であり、それゆえ必然的に彈壓の對象となったのである、と結論づける。

第12、13章は、民衆運動と祕密結社という本書のメインテーマからやや離れて、中國の知識人を分析の俎上に載せる。第12章は「中國農村經濟研究會」に加わった知識人たちの農村研究、第13章では、『中國農村』誌に關わった人々が抗日戦争中にそれぞれ國民黨、共產黨支配地域で展開した活動を考察した。民衆の世界だけではなく、同時代中國の知識人たちが農村問題についていか

に思索し、中國の共產主義革命とどのように関わったのかを考察したこの二つの章から、著者の學問的關心の幅廣さがうかがえる。

## 二、本書の貢獻と問題點

評者は、研究分野が著者のそれと近いため、二十年以上前から著者の論文を読み、著者が使った史料もほとんど閲覽した。先行研究を批判的に検討し、可能な限り文献、新聞、地方志などの史料を幅廣く収集・分析する著者の研究姿勢は一貫しており、その成果として生まれた一つ一つの實證論文には前人を超える著者独自の知見が含まれている。讀者も、著者の長年の學術研究の成果である本書を通じて、著者の研究者としての高い資質を感じ取ることができらるだろう。

書物は著者と讀者、知の生産者と消費者との對話の場である。本書は著者三谷氏とそれまでの研究者との對話の場であり、また、著者と評者を含む本書の讀者との對話の場でもある。前者については、本書の淡々とした敘述には、先行研究に對する著者の鋭い批判、テキスト分析に基づいた新たな知見が反テーゼとして現れている。「革命史觀」が民衆史研究の主流であった時代において、著者は、先入觀をもつて民衆の世界を観察すべきでなく、民衆自身の言葉や行動を通じて民衆運動の内在的な論理を見いだすべきである、という研究姿勢を明確に打ち出した。著者は、一九七〇～一九八〇年代に發表した河南省の紅槍會運動に關する一聯の研究において、紅槍會と刀會は「自衛的、排他的」原理に基づいた組織であり、さまざまな政治勢力が拮抗するなかで、これらの組織は自らの組織原理に基づいて具體的な對應、選擇を行つ

た、という独自の論點を提起し、紅槍會研究を着実に前進させた。とりわけ特筆すべきは、中國の共產主義革命に關する研究が壓倒的な影響力を占める時代において、著者は、いわゆる「反革命」側を對象とする中國國民黨史に關心を寄せる数少ない研究者の一人である、ということである。著者は初期の南京國民政府と民衆、中央政治と地方社會との關係という新しい分野を開拓し、南京政府の「迷信打破」を手がかりとする著者の研究は、今でも多くの研究者に引用されている<sup>(8)</sup>。中國民衆史研究、祕密結社研究における著者の學術的貢獻は日本だけではなく、中國、アメリカを含む世界の中國研究者の間で廣く認められている。

一九八〇年代、アメリカの中國研究者P・コーエンは、戦後アメリカの中國研究を批判して、「中國に即して」中國を研究することの重要性を強調し、溝口雄三氏も「方法としての中國」を提起しそれまでの日本の中國研究を批判した<sup>(9)</sup>。これをきっかけに、世界の中國研究者の間で中國研究の方法論をめぐって幅廣い議論が行われた。著者は、それより十年も早く、一九七〇年代からすでに自覺的に「中國に即した」研究を實踐した。内山氏の序論によれば、著者はかつて内山氏に、西郷信綱の『古代人と夢』（平凡社、一九七五年）や河合隼雄の『影の現象學』（思索社、一九七六年）からヒントを得て、中國の祕密結社天門會の「夢古い」に含まれた合理的な要素に關心を持った、と語った。これは期せずして祕密結社に關するジンメル（G. Simmel）の考えと一致している。ジンメルは、「祕密は、公然たる世界とならぶ第二の世界のいわば可能性をあたえ、そしてその公然たる世界は、この第二の世界の可能性によってきわめて強く影響されている」<sup>(11)</sup>、と述

べている。このような關心から、一九八〇年代末以降の著者の研究は、社會史の觀點から民衆運動の内在的論理を理解する方向に變わる。それを象徴するのは著者を中心とする日中兩國の研究者が一九八〇年代に華北地域で行った大規模な共同調査・研究であった。共同研究チームは戦時中にここで調査を行った滿鐵調査部の人々の足跡に沿って再び調査を行った。『中國農村變革と家族・村落・國家——華北農村調査の記録』（三谷孝編、汲古書院、一九九九年）がその成果である。著者にとつて、この大がかりなフィールドワークは、自らの研究を見つめ直すきっかけでもあった。たとえば、天門會に關する研究において、著者は、「民衆運動や民間の秘密結社について後世に資料が残るのは、ほとんどの場合、それが暴動や官憲による摘發などを契機として、秘密裡に行われてきた活動が露呈したことで、人々の注目を集めた時である」（二四〇頁）と述べ、秘密結社關聯の史料との新たな向き合い方の可能性を示唆している。

評者が本書を読んでやや疑問を感じたのも、著者が晩年提起したこの史料との向き合い方の問題である。著者が利用した史料のほとんどは秘密結社以外の「他者」の手によるものであり、これらのテキストがどこまで秘密結社側の訴求を表しているのだろうか。一例を挙げると、著者は本書第7章において、國民黨側の新聞を丹念に読み込み、蘇北小刀會の暴動事件の歴史的過程を再構成した。しかし、當時複数の新聞にこの事件に關する記事が多数掲載され、書き手の立場によつて、記述や論評が大きく異なる。著者の研究では、事件をめぐる同時代の新聞記事の相違は問題視されていない。著者は極樂庵の僧侶が小刀會事件の首謀であった

と斷言しているが、著者が利用していない中國第二歴史檔案館所藏の關聯資料を繙くと、國民黨側が寺の廣大な土地を手に入れるため、極樂庵の僧侶に「暴動」という罪を被せた、という事件の眞相が浮かび上がる<sup>12)</sup>。また、著者は明治以降日本人が中國で行つた秘密結社調査を高く評價しているが、平山周の『支那秘密結社及革命』を含む一聯のテキストがどのような経緯で作られ、どのような傾向性を有するかも問われるだろう<sup>13)</sup>。

長年にわたつて中國の秘密結社を研究してきた評者の立場からすれば、秘密結社は絶えず「再生産」される概念である。秘密結社は「實體」と「言説」の中間にある存在であり、中國社會に普遍的に存在する人間關係および人間關係のネットワークの結節點である。それゆえ、秘密結社研究は「秘密結社」を「脱構築」することから始めなければならない。すなわち、これまでに主に權力によつて作られた「秘密結社」をめぐるさまざまな言説に抗して敘述する、ということである。このような研究スタンスは「現代中國秘密結社」敘述を構築しようとする著者のそれとは必ずしも一致しないが、評者は、著者の早すぎる逝去を悼みつつ、著者の遺著となつた本書が民衆運動に對する研究者の關心を呼び、著者の未完の學問の営みに後継者が生まれることを切に願う。

#### 註

(1) 田原史起『二十世紀中國の革命と農村』（世界史リブレット）山川出版社、二〇〇八年、二頁。

(2) Joseph Escherick, "Ten Theses on the Chinese Revolution," *Modern China*, 21(1), 1995.

- (3) Elizabeth J. Perry, "Reclaiming the Chinese Revolution", *The Journal of Asian Studies*, 67 (4), 2008.
- (4) 李澤厚・劉再復『告別革命——回望二十世紀中國』、香港天地圖書有限公司、一九九七年。
- (5) Elizabeth J. Perry, "Studying Chinese Politics: Farewell to Revolution?" *The China Journal*, No. 57, 2007.
- (6) 三谷孝『秘密結社與中國革命』、中國社會科學出版社、二〇〇二年。
- (7) 拙著『近代中國の革命と秘密結社——中國革命の社會史的研究（二八九五～一九五五）』、汲古書院、二〇〇七年、第一章。
- (8) 例文『Prasentit Duara, *Rescuing History From The Nation: Questioning Narratives of Modern China*, The University of Chicago Press, 1995.
- (9) Paul A. Cohen, *Discovering History in China*, New York: Columbia University Press, 1984. 佐藤愼一譯『知之帝國主義——オリエンタリズムと中國像』、平凡社、一九八八年。
- (10) 溝口雄三『方法としての中國』、東京大學出版會、一九八九年。
- (11) シンメル『社會學——社會化の諸形式についての研究』(上)、居安正譯、白水社、一九九四年、三七一頁。
- (12) 拙著『近代中國の宗教、結社と權力』、汲古書院、二〇一二年、第九章。
- (13) 拙稿『平山周『中國秘密社會史』の底本と著者について』(未刊、評者が二〇一〇年一月二日に孫文研究会主催の研究會で行った報告)。

二〇一三年二月 東京 汲古書院  
A五判 三九八頁 一〇〇〇圓十税